

東京湾の船宿で姿を消しつつある投網の伝統を守ろうと、江戸川の船宿が来月、「江戸投網保存会」を結成する。大型の屋形船ブームで先祖から受け継がれた技を学ぶ機会がめっきり減ったが、「屋号に恥じない技を守りたい」と、若手たちが意気込んでいる。

(四倉 幹木)

## 船宿15軒の若手「保存会結成へ」

4、5人乗りの川船から投網を打ち、かかったセイゴなどの魚を船上で入るなどによって食べさせる。

江戸時代から続く伝統の投網を江戸川で見える機会は、ここ15年ほどでほとんどなくなった。

バブル期に起きた屋形船ブームで、船宿は次々と船を大型の屋形船に切り替えてゆ

く。100人近くが乗れる屋形船では、投網が有効な岸辺近くに寄ることができない。魚が捕れども大勢の客にはいき渡らない。船遊びが昼から夜に中心を移したことも、投網を衰退させた。

江戸川の船宿「あみ座」の主人、小島直明さん(46)は「最近はずから頼まれたと音にしか打たない。年に4、5回になっちゃった」と言う。

カラオケまで積んだ屋形船全盛になっても、船宿の屋号は、例えば「あみ座」「網さだ」と投網時代のままだ。船宿の主人たちの投網への愛着は深い。

3月末、屋形船の並ぶ江戸川河岸の居酒屋に、近辺の船宿15軒の跡取りたちが集まった。

「投網の技が自分たちの代で消えていくのは、先祖に申

## 屋形船ブームで衰退「屋号に恥じぬ技を」

し訳ない。みんなですっぴいころじゃないか」

5月に保存会を立ち上げ、仕事の合間を見て投網の腕を

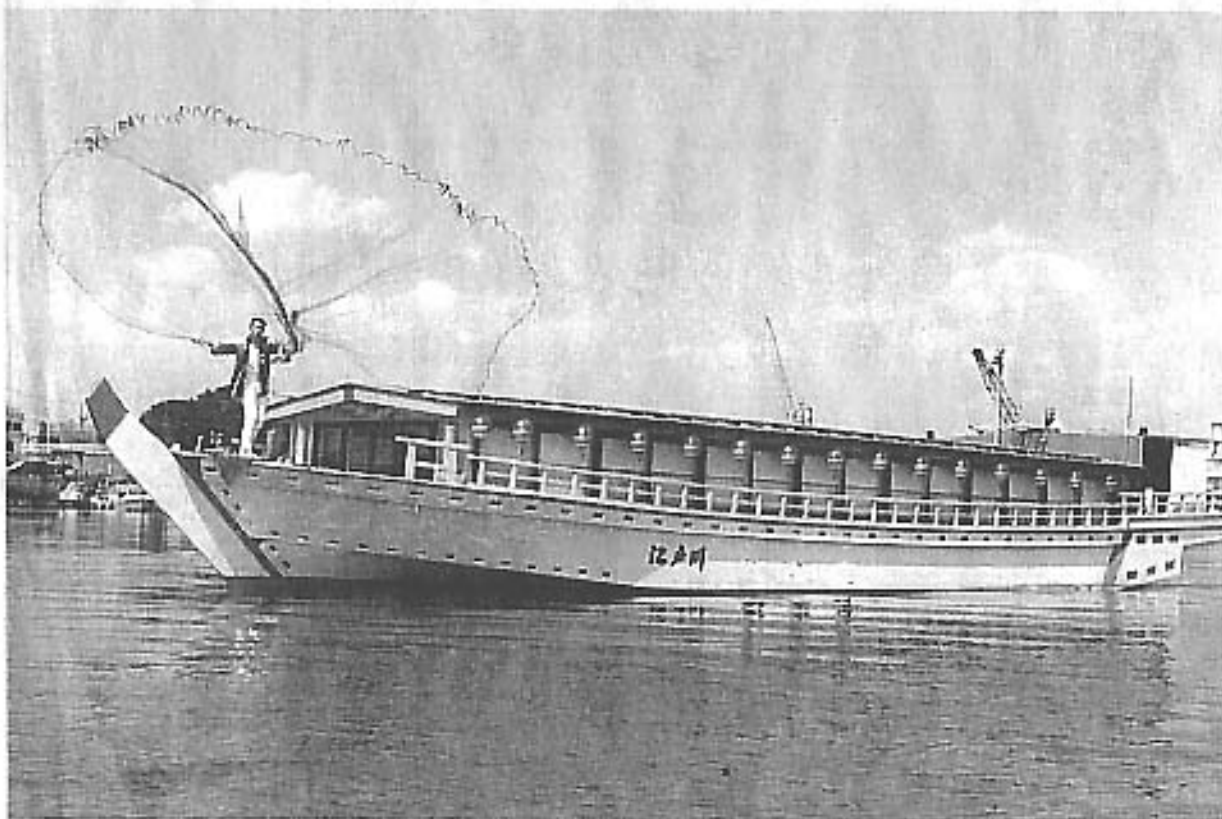
磨くことに決まった。「細川に経験が必要だ。」「あみ座」の小川啓二さん(31)は「網の打ち方は基本を知っている程度。屋号を背負った者として恥ずかしいない技を身につけたい」と話す。

深瀬で使う投網より大型の投網を使うため、花のようにきれいに広がるのに、2年はかかる。

船を操る「かじ子」と息を合わせ、風や潮を読んで魚を捕れるようになるには、さら

に経験が必要だ。」「あみ座」の小川啓二さん(31)は「網の打ち方は基本を知っている程度。屋号を背負った者として恥ずかしいない技を身につけたい」と話す。

「おやじの代までは、投網の魚を市場にも出していた。今の川は十数年前よりきれいなくらい。江戸川の魚がおいしく食べられることを、お客さんにもぜひ知ってほしい」と、小島さんは意気込む。



見られる機会が少なくなった江戸川の投網漁